2019.9.1

現代俳句千葉

134号

巻頭エッセイ

流れ流れて

企画部長　東　國人

私は、昭和三十五年四月、鋸南町に生まれた。だから、本籍地は千葉県になる。ただ、その後は、父親が乳業会社に勤めていた関係で日本全国を回った。最初は、藤沢、藤枝、安城、磐田と関東東海地方だったが、その後、鳥取の大山、北海道の今金と都会からどんどんと離れた僻地になっていった。このころは高度経済成長の時期で、都市近郊から酪農が、衰退しどんどんと地方へ移っていった時代を反映している。人間の数より、牛の数の多いところに長く住んだ。

そのため、私は幼稚園二園、小学校二校、中学校三校を経験した。まさに「流浪の民」であった。多感な少年期に、この経験は、私の人格形成に大なり小なり影響を与えた。幼い頃からの友人、竹馬の友というような親友が、私には全くいなかった。いつも、よそ者、少し親しくなったら、転校という繰り返し、その上、私は一人っ子であった。家には兄弟姉妹もいない。学校でも、心から友人と親しくなれない孤独、家でも孤独。本当に孤独な子供であった。

子供は残酷である。転校生の私には、いつも、無理難題が回ってきた。教室では、何か大変面倒な事、例えば、運動会の四〇〇ｍの選手、意見発表会のクラス代表などなど皆がやりたくない事を、クラス討議の場における民主主義の原理に基づいた、賛成多数という、少数意見を無視した決定により、常にその難題が私のところにきた。だから、今でも私は多数派の民意が、常に正しいとは思わない。少数派の意見にも心を配ることのできる人間になりたいと思っている。

今思うと、よく不登校にならなかったと思う。ただ、朝起きるといつも体調が悪かった。

だから、いつも自然を相手に、一人遊んでいた。身近の動物、植物。それは、私の心を和ませてくれる存在であった。親がやっていた俳句に、興味を持ち始めたのも、そんな少年時代であった。これが、私の俳句の原点である。

雲の峰いつも周りに牛がいた　　國人

目　次

流れ流れて　東　國人 …… 1
『千葉県現代俳句集成二〇二〇』参加のご案内 2
四十周年記念基金の募集 …… 3
会員・会友の近況 ① …… 2～3
諸家近詠 …… 4～7
私の感銘句 …… 8～11
津田沼研究句会報告 …… 12
青葉研究句会報告 …… 12～13
柏研究句会報告 …… 13
会員・会友の近況 ② …… 13
ひろば　図書紹介 …… 14
掲示板 …… 14

千葉県現代俳句協会会報

創立四十周年記念合同句集編纂

『千葉県現代俳句集成二〇二〇』参加のご案内

この度の合同句集は、資料編も共に三十周年記念の二〇一〇年版を引き継ぐ形で、当協会の豊饒のアンソロジーを目指して編纂します。会員・会友、新規入会の皆様もぜひご参加ください。

＊応募の詳細は同封の応募用紙をご覧ください。

○作品の仮名遣いは新旧自由ですが、一句中の新旧混在は不可として、編集方で訂正します。

○参加費（三千円）には一冊分の費用を含みます。追加ご希望の方は振込用紙の通信欄に冊数を明記し、合計金額をお振込みください。
友人知人へのご寄贈、お薦めの記念句集です。

○**応募締切**　令和元年十二月三十一日（当日消印有効）

＊**俳歴記入欄**　本名以外、無用の項目は空白に。

＊**作　品　欄**　俳名（ふりがな）と標題をお忘れなく。
楷書で丁寧にお書きください。

○ **応募用紙の送付先**
〒270－1471　船橋市小室町２８０４　高木　一惠 方
千葉県現代俳句協会　合同句集刊行委員会
＊電話連絡先　０４７－４５７－２９１２
（用紙の追加等はご一報を・午後９時まで）

○ **参加費の振込先**（必ず振込用紙で納入してください）
ゆうちょ銀行口座　００２５０―１―８９８５０
（当座 〇二九店）
加入者名　千葉県現代俳句協会40周年記念合同句集刊

《会員・会友の近況》①

・七月で八十八歳になりました。元気です。囲碁に夢中です。（新井　秋芳）
・ここ三年体調が悪く出歩くことも少なくなりました。つくづく健康が大切と痛感しています。（青木　一夫）
・映画「天地悠々兜太俳句の一本道」を見ました。晩年の兜太氏の言葉を深く噛み締めています。（池田　和人）
・六月二十三日、九十三歳になりました。俳句を楽しんでおります。（加藤昌一郎）
・久しぶりに東北の旅を楽しんできました。旅はよきかなです。（井上けい子）
・六月中旬、同窓会で鎌倉へ。人の多さに紫陽花もびっくり？　話題はいかに晩年を生き抜くか。答えは出ませんでしたが、互いの健康を願い帰路につきました。（岩岡　方子）
・腰を痛め歳を感じるようになりました。皆様、お大切に。（口村　洋子）
・この度、作品依頼誠に有りがとうございました。いまだ投句が出来るのは倖せなことで老齢ながら続いております。いつも「これが最後」と念じながら、この度参加できるのが嬉しく思っています。（菊地　京子）
・ＮＨＫ六月三十日放映の「歳時記食堂」は宇多喜代子先生が女将、奥田瑛二さんが客人。旬の食材（当日はそら豆・鱧・みつ豆）を味わいながら、俳句も味わう。「運転免許返納は制限あれど俳句は死ぬまで」と。心に残る楽しい番組でした。（栗山美津子）
・長い間、眠っていたピアノを始めました。（認知症予防によいという）静かな生活の中に音が入りました。（川島　里子）

■四十周年記念基金の募集

四十周年記念事業を円滑に実施するため、六月の会報で皆様に基金のお願いを申し上げましたところ、早くも沢山の方から拠出に応じて頂いています。有り難うございます。領収の意味を込めて、以下にお名前と口数を挙げさせて頂きます。

なお、引き続き、次の要領で基金の募集を行ってまいります。皆様方のご協力をお願い致します。

一　期　間　令和二年三月十五日まで
二　目標金額　百万円
三　一口の金額　千円～何口でも可
四　払い込み先　ゆうちょ銀行
口座　００２３０・６・１０６２３８
加入者名　千葉県現代俳句協会四十周年記念基金募集委員会

払込用紙を紛失または再応募などでお要りの方は担当までご連絡ください。

担当＝基金募集委員会委員長　髙橋　宗史
〒２７８-００４３　野田市清水５２７-１０
電話　０４-７１２５-３３８２

■四十周年記念基金参加御礼

（令和元年六月一日より七月末日まで）
（一口千円・敬称略）

〈一口〉森井美恵子・大地節子・原　悦子
〈二口〉金澤惠子・小林　実・多胡たかし・相原一枝・関谷ひろ子
〈二・五口〉中澤一紅
〈三口〉千葉信子・細野一敏・岡田春人・神作仁子・細根　栞・松本千花・保坂末子・佐藤禎子
〈五口〉髙橋健文・鈴木まんぼう・吉田耕史・岡崎　翠・永井奈々・佐藤映二・袴田菊子・重田忠雄・羽村美和子・上野紫泉・匿名二名
〈十口〉横須賀洋子・高桑婦美子・伊与田すみ・鳴戸奈菜・実籾　繁・田沼美智子・渡辺　澄・山中葛子・野口京子・星野一惠・清水　伶・東　國人・下村洋子・越野雄治・木之下みゆき・久野康子・椎名鳳人
〈二十口〉徳吉洋二郎・吉野　精
〈三十口〉津髙里永子
〈四十口〉髙橋宗史
〈五十口〉並木邑人・檜垣梧樓・高木一惠・匿名一名

計五十四名・五七九・五口（五六九、九二八円）

■創立四十周年記念　俳句大会と作品募集

期　日　令和二年三月十五日（日）
会　場　千葉市文化センター
作品募集　令和二年一月三十一日まで
※詳しくは同封のチラシをご覧下さい。

■秋の吟行会

場　所　都立葛西臨海公園
日　時　令和元年十月三日（木）
句会場　船橋市勤労市民センター
※皆様のご参加を楽しみにしております。

・枯れない老人が今とても増えていると思う。人生百年時代や働き方改革とやらで、一人一人の時間が増えていると聞きます。最短詩型の俳句に出会えたことは何よりの喜びです。歳時記や二十四節季などとの世界は嬉しい限りの生活状況を産み出してくれています。（北野　耕太）

・野田俳句連盟が本年七十五周年・一五〇回。その記念大会も終え、現在記念誌発行の準備に追われています。私は、脊柱管狭窄症により両足の痺れと痛みで歩行に難儀しております。（椎名　鳳人）

・先日岩手へ。草笛年次大会に参加。帰り、みちのくの貌鼻渓、中尊寺、毛越寺等を巡り、ありし藤原氏をしのんで旅をしてきました。藤原氏のミイラの保存は世界に類を見ず。あと、一五〇年位は持つと言っていました。（川又　優）

・最近一年が速く過ぎるように感じますが、振り返って出せる句ができていることに幸せを感じます。（河合　利枝）

・気力・体力の衰えを感じるこの頃ですが、手足口病になり、全身に発疹。足裏が酷く激痛にて歩けず。吟行会で参拝した真間の手児奈に心から祈る日々。（遠藤　寛子）

・青葉研究俳句会、ご一緒させていただき九年になりました。私は相も変わらず中途半端に落胆の日々ですが、どうにか後列について行けそうです。（加藤　法子）

・加齢と共に感性が衰え、筆を下すことも考えますが、それを無くすと、益々衰えが加速すると言われ、夫の看守りと俳句の二人三脚で元気に過ごしております。（伊藤　希眸）

諸家近詠

新井　秋芳

名草の芽それぞれの彩夢に満ち
朝柚子湯百まで生きる意図生まる
死に処得たとの便り東風の島
血糖値気にならぬ嘘桜餅
鳥雲や捨てるに惜しきもの数多

青木　一夫

航跡の広がるところ太宰の忌
麦秋を行くほど疑心暗鬼かな
平成を斜めに見てる羽抜鶏
終活に賛否両論花は葉に
仏壇を抜け無機質な風になる

伊与田すみ

陶かけら一乗谷の糸さくら
すてられし故郷の田よ山桜
遠くから大野五條屋青葉風
卯月令和悪女のような目の化粧
大聖堂の石段狭し初夏の風

池田　和人

疲れゐし人にやさしき冬岬
人生の流転のやうや雪解川
角砂糖一個分なる春愁
三月やどうしても海見てしまふ
社会性俳句は朽ちず今年竹

里見　さち

山藤のひと色加へ空の青
家迄の五分を春の時雨かな
すいと脚のばしてたたむあめんぼう
藤の実のバキッと折れる骨の音
置かれたるやうに白鳥一家族

加藤昌一郎

テノールの似合うマストに育ちけり
水切って涼しや妻も俎板も
もう一息で猫と金魚は植物だ
紙オムツの私にバカ穴とか雌ネジ
チューリップが隠す匕首土踏まず

塩野谷　仁

風の木と風の黒牛明日は夏至
おもいでの鉄棒に降るから緑雨
夏茱萸を採りに来よという友夢に
雨にすかんぽその先の雨に馬
可惜(あたら)夜の金魚売なら従いてゆく

井上けい子

森の迷路に野獣出没夏来る
薫風やなんじゃもんじゃがキャンパスに
初夏の浄土ヶ浜を船出する
夏怒濤奇岩断崖そそり立つ
岩手山その頂きに残る雪

岡田　春人

初鏡妻には皺が見えてない
春祭にわとりの首しめており
こどもの日遠くに飢えと戦いと
露天湯の今が幸せ虫の声
四人から今年限りの年賀状

坂間　恒子

言語空間に陽炎の立ちあがる
白藤や少年ジャンプ繰り返す
幾万の蝶翔つ水の記憶かな
身体のどこを押しても蝶の昼
夕顔のいちりん古代微笑かな

小野　功

釈迦力に直立不動ねじれ花
枇杷たわわ寛容にしてとらわれず
こんなにも燃えていいのか夏満月
立葵明日の見ゆとき見えぬとき
むこう向く大ひまわりの黙秘権

浦野　五郎

水馬や不眠不休ではなからう
たてよこにしあはせのくるさくらんぼ
生きものの連鎖は確と木下闇
逢魔が時八人目かな蟻蠍は
ステントの広ぐる齢大昼寝

川嶋　悦子

秋の夜ひたひたと黒人霊歌
歌うなら下弦の月に腰かけて
メタセコイア天指し赤いアンタレス
冬の流星ソリストの弦切れて
石蕗明かり貧しき時代のひとところ

岩岡　方子

外堀を埋め葉桜の息遣い
欲張りな拍手であり寒の水
二度とない命存分蟬時雨
春嵐武器を持たない風見鶏
抜け道に赤い二輪車秋深む

菊地　京子

幻想の明細として牡丹雪
臘梅を仕立て直して訪問着
類想の葉ぼたん普通がむずかしい
乱文のあじさい乱筆の告白
米寿これいかに鰻に攻められる

諸家近詠

大見　充子

嗚咽とも桜ふぶきのど真ん中
花ざくろ薄暮の空は母に似て
山鳩よ金柑のもう熟れるころ
秋の海羽生えて私はかもめ
侘助の開き切らぬは矜持なり

齋藤　禾光

春の海竜宮からの使者が来る
耳鳴りはさくらんぼうの世迷い言
太陽の滅びて白し白紫陽花
すっぴんの花輝ける夏野かな
残る月ヒメロカリスは咲き始む

佐藤　禎子

裏声のこぼれてきたる桐の花
奪衣婆の夫らし藤の花動く
虎杖を噛んで歪みし大家族
足音を消して貝母の花に寄る
ゴールデンウィークニスの匂い立つ

宇佐見房司

スキップの子らに弥生の土優し
少年ランナー会釈し過ぐる花の下
それなりの咲き方もあり老桜
吾も鳥も口赤らめてどどめ摘み
浜木綿や友送りたる夜を想ふ

口村　洋子

春一番卵の黄身が尖ってる
百歳へ未知の界隈桜咲く
しばらくは桜の残像句会場
土筆野の斜面をゆすり特急車
春うららシニア俳句に頷いて

栗山美津子

父の通夜父の育てし梅匂ふ
万緑にリボンの如く朱の鳥居
カシニョールまねて頬杖梅雨のカフェ
雲水の只管打坐なる溽暑かな
嗣治の懐に猫夜の長し

蛭名　節昌

声のやや上擦っている蓮の花
錆色に歯形の残る青林檎
アルバムへ水着の母に会いにゆく
不機嫌が男に移り夜の海月
手足もて進むも引くも盆踊り

小林　実

春や春父の化粧の濃くなって
全員の敗けるあそびか夏が来る
炎天下かならず墜ちる橋渡る
夕焼けの神田西口獣道
雪解川昔女の流れゆき

澤田　寿一

空腹は生きる糧なり鯉幟
涼風に手話を乗せたるバイオリン
住み馴れて何を楽しむ曼殊沙華
詰襟の少年となる明治節
初雪に遠くのことと思わざり

重田　忠雄

彼の世でも反戦兜太旱星
コンビナートの深き錆色晩夏光
青嵐女庭師のイヤリング
バレンタインデー美しすぎる紙袋
ひとりごとの別姓夫婦缶ビール

小野富美子

春の鳥ごと売られゆく雑木山
銭湯の消えて春月残る町
パンに挟む噛みごたえなき春愁
春風よわたしを素数分解せよ
さくら見るたびやわらかくなる言葉

北野　耕太

妻のこと知らない時間春の星
水匂ふ夏野の岩に腰掛けぬ
むかし昔君の住む街赤とんぼ
海を視て人間探求派波郷の忌
さまざまの背中のみえる初不動

椎名　鳳人

鯉幟否定も依存も無く泳ぐ
毒気いま眉間にありぬかき氷
木洩れ日や首なし地蔵に百の耳
顔じゅうが令和吉日初燕
測り疲れて尺蠖棒になって寝る

越野　雄治

風車母に渡せばよく廻り
地下蔵にワイン眠らせ山笑ふ
漉餡の喉に冷たき朧かな
チューリップどこか壊れてゆく日なり
よもつひらさか彼奴なら夕涼み

久野　康子

ネモフィラの青い引力無人駅
まひるまのひだるきものに夏の蝶
父の忌のとおくに絡むハンモック
かき氷こめかみ聳えはじめたり
短夜のトンネル長すぎてならぬ

諸家近詠

窪田　俊作

パスを受け夏野の風になってゆく
水打って見えてくる源氏物語
吹き抜ける真っ赤なポルシェ夏木立
黒南風やそろそろ探る落しどこ
ブラックホールこおろぎが鳴いている

川又　優

姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる
兜太逝く秩父連山葛あらし
少年の喉のとがる草の笛
下駄の子もはだしの吾れも終戦日
八十歳の顔を写してしやぼん玉

加倉井允子

赫々と玉の緒つなぐ凱夫の忌
峰雲は男の虚栄海に立つ
百咲いて百の静寂野の辛夷
初蝶にゆらと応える象の耳
海の日や千尋に叫ぶ倅の名

河合　利枝

芝離宮稚の転ぶや春の風
雨傘の止まる角あり萩の花
曽祖母の遺品の中の胡桃二個
甲板を右往左往す南十字星
心根に向日葵置きし日の遠く

興津　恭子

遠距離を祈るほかなき梅の花
じゃがいもの花土塊の気怠さよ
太陽光パネルの規律半夏生
玉ねぎのスライス記憶曖昧に
梅雨鴉年金老後言い募る

尾形ゆきお

どの洞も言葉にみちて去年今年
寒鯉の念力水は動かざる
ドッペルゲンガー梅林に汝と吾と
また不在また梔子の匂う家
ブラックコーヒーつと眼を逸らす檻の鷲

佐藤美紀江

啄木鳥や郵便屋さんの来る時間
燕来る安房のペンションに猫生まる
鯵の干物頭から食む八十路かな
籐椅子や男となりて帰省せり
涅槃図や水子地蔵は庭の中

小林　俊子

抜き足の闇へほうたる忍び寄る
晩年は自由なとびらへぼ胡瓜
星涼し聖母マリヤの青い部屋
談笑の椅子盛りあげる行々子
梅雨ぐもり食虫植物口閉ざす

遠藤　寛子

夏の風邪抜けぬ大人になりにけり
千枚田思い思いに蛙住む
畔道はひとっこおらず立葵
病去り冷し珈琲でも飲もうか
プールバッグずしりとなりて帰宅する

加藤　法子

白いマフラープロペラの音がする
生も死もだんだん淡くしろばんば
人の名の咄嗟に消えて冴え返る
置き去りし雛の安否を今更に
蟇出でて尤もらしく身構える

齋藤　溥子

大木蓮天へ翳して師の逝けり
句誌開き令和の五月師を偲ぶ
紫陽花の参道細き藍の川
青田見てすて田数える帰郷かな
迅雷の一発身体沈む夜

神作　仁子

語り部も被爆者であり石蕗の花
国分かつ有刺鉄線春霙
蘆牙や金子兜太の目が光る
さくら餅指の先まで母がゐる
石ころも地球の欠片春の風

伊藤　希眸

椿眞つ赤ぽつと落ちたり指の麻痺
青柿を洗ひ盡して雨上がる
水脈を曳く蛙目で追ひ握り飯
ブルースカイさらさら泳ぐ竹の花
川越ゆる声の野太し冬隣り

岩﨑　令子

古書店の少年倶楽部鳥雲に
楼閣の門より駱駝春疾風
老人の懐中時計アマリリス
寺町を冬の顔して男来る
少年と夏目漱石冬の駅

岡田　淑子

毎日が住所変更かたつむり
夏蝶のからみ合いたる楽屋口
河童忌の日暮里駅で水を飲む
百歳は遠くて近し椎若葉
越谷に西日の似合う久遠仏

諸家近詠

岡﨑　翠

俯瞰する「令和」人文字風光る
蜘蛛の囲や東京路線地図遊び
紅花の摘むほどに手の染まりゆく
のらくろの漫画ひとこま蟬しぐれ
退職の紅さす筆も春霞

黒澤　雅代

一食に足すとするなら春の月
葱坊主沖へ漕ぎだす櫂がない
膝抱けば淋しさがふと蝶になる
日の暮れは木の実に戻る木の実独楽
父性とは梟の鳴く距離であり

内田　庵茂

バーボンを呷つてバレンタインの日
日脚伸ぶダビンチ描きし人体図
両腕の長さ異なる昼寝覚
やや金気帯びし井戸水終戦忌
鵙日和屋根の上より命綱

市川　唯子

雨のち飛燕塗壁が匂い出す
青き踏む鳥類少年の切符
心臓を写して帰るしゃぼん玉
百合の瓶ずらせばテーブルの広野
ほろほろとどの辞書も五月の痛み

佐々木幸子

水割って河馬現れる浅き春
風薫るドガの踊り子靴を脱ぐ
世界史はおおかた戦史きぎす鳴く
でで虫に葉脈という路もあり
ゆたかなる馬の睫毛や明易し

小池美佐子

気に掛かる対角線に夏帽子
プリン固まる迄の刻薔薇崩れる
果てしない論争の行方濃紫陽花
最後尾の人を追い越す蝸牛
病葉の無念拾って帰路に着く

川島　里子

万緑を騒がすピアノ調律師
雲呼びて雨と語りし額紫陽花
信濃路に母衣の破れし敦盛草
野の猫の住処と知らず草を刈り
核廃の母子像囲むカンナ群

岡田芙美子

元気ねと言われて帰る蝸牛
新緑の和服で銀座傘寿来る
つばくらめ昭和平成来る令和
閉店しすぐ現れる春の使者
断捨離を子に強いられる桐の花

小多田文子

山里に五畝一枚の麦の秋
狛犬の阿吽の口に春の雪
新茶汲む終の一滴分けて汲む
蜜豆や話題はいつも妣のこと
反転の技美しき金魚かな

佐久間眞城

もんぺ疎開語って聞かす終戦日
戦せぬ艦泊りおり敗戦忌
初恋は実らぬがよし秋桜
方五尺褥とせんか虫時雨
苦吟とは云いけるものよ温め酒

大澤　重市

きっと君は秋の水におぼれるだろう
ペン先の割れ目生む文字蟬の声
初燕バランスをとる一輪車
あめんぼう風を読んでは飛ぶつもり
解けそうで解けぬ問題梅雨明ける

佐藤　浩子

熱帯魚店ブラインド上げ風容るる
愛鳥日迎へひときは高く鵙
蟻しきり穴を登四郎句碑のまへ
夏うぐひす窓を行き交ふナース帽
ハンカチの木の花駆ける子に声援

金子　敏

篝火花突風が来て人が来て
臘梅や昨日の嘘のばればれで
涅槃西風雲の分布をかき乱す
藪を漕ぐ五月の空にあいたくて
秘め事のいつか露わに水中花

鮫島いづみ

魂を揺する句欲しや夏の空
虹を追うもうその年齢にあらねども
地震津波本土呑みこむ土用波
遊（ゆう）という境地はるけし五月雨るる
梅雨の駅また生き直すことあらば

小野　裕文

人体がそっと春へときりかわる
戦場へ行かず送らず立葵
神無月捨てた遺品がまといつく
日だまりの老人と本小鳥来る
さびしさの入れ物がない枯野ゆく

私の感銘句

作者名	号	頁
津髙里永子		
雛の夜は雛の顔して出てゆかん	山﨑　政江	128 2
「イマジン」を聞きたくないか山椒魚	加倉井允子	128 3
春野を歩くさびしがるてのひらと	岡田　春人	128 3
万緑の奥へ奥へと返信す	小野富美子	128 4
破芭蕉ばさりと昼を裏返す	長井　寛	129 8
春の野の人に曇天熟れてゆく	塩野谷　仁	129 8
花前線長寿の村を通りおり	菅ノ谷文子	129 9
湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜	田村　麗	131 4
抜刀の方舟であり枯蓮	並木　邑人	131 4
海の墓標飛び魚の翅透くところ	羽村美和子	131 5
花前線長寿の村を通りおり	菅ノ谷文子	

のどかな光景が窺える。老いとか過疎とかマイナス面が感じられないところがよいと思った。ゆったりとした調べも快い。ただ、生意気を言わせてもらえば、上五の「花前線」はやはり「桜前線」ということばのほうが、もっと掲句を華やかにするのではないだろうか。ぽっぽっと咲き初むる桜のひとひら、ひとひらがより見えてくるように思えるのだが。このような時間空間を大きく捉えた句を私もいつか、作れるようになりたいものである。

泉　志眞子

雛の夜は雛の顔して出てゆかん	山﨑　政江	128 2
満天の星に落ち着く刈田かな	山中とみ子	128 2
蝌蚪に足ラストダンスの靴がない	加倉井允子	128 3
さくら草仲良きこともくたびれる	加藤　法子	128 4
春昼の木々に声なし兜太亡し	塩野谷　仁	129 8
朧の夜優しい人から消えてゆく	小張　直子	129 9
組紐のかたりことりと伸びて春	高橋富久江	130 2
水中花女の余熱尽きるまで	長濵　聰子	130 3
困り果てた奴から糸瓜になりにけり	並木　邑人	131 4
吾亦紅静かに主張通しけり	日野　葉子	131 4
岡﨑　翠		
曼珠沙華だれかに水をもらいおり	楠見　惠子	128 4
天ぷらにモンゴルの塩鳥雲に	里見　さち	129 8
春昼の木々に声なし兜太亡し	塩野谷　仁	129 8
鎌倉の余寒と言えば虚子がいて	小林　実	129 9
しろがねの旋律からす瓜の花	千葉　信子	130 2
終わったとどこかで思う夕端居	直江　裕子	130 3
夕端居猫に教わる風の道	富澤ムツ子	130 4
炎天を抜け東京を抜けられず	徳吉洋二郎	131 4
戦争が好きな星なり我が地球	鳴戸　奈菜	131 5
秋深し改めてみる卓の脚	袴田　菊子	131 5
曼珠沙華だれかに水をもらいおり	楠見　惠子	

東京から一時間ばかり林間に約五〇〇万本を越える真赤な日本一の曼珠沙華の群生地、高麗川にかこまれた巾着田がある。その景を思い浮かべた。

掲句の「だれかに水をもらいおり」にはっとした。生きるものにとって水は欠かすことのできないものであって、あの深紅の曼珠沙華も然り。だれかに水をもらっているのだろうと思う作者の「一人では生きられない」の声が伝わる。

田沼美智子

水無月の膝から下はわからず屋	横須賀洋子	128 3
さくら草仲良きこともくたびれる	加藤　法子	128 4
反射とはたんぽぽ見れば出る笑顔	大坂　吉也	128 4
真夜転げくるまろうどと花片と	塩野谷　仁	129 8
背を押され別の自分になる寒さ	小林　実	129 9
色あせしセーターの恋捨てられぬ	小多田文子	129 10
だいじょうぶは魔法の言葉あたたかし	黒川　秀夫	129 10
人の顔って眼のことさ冬の星	髙橋　宗史	130 2
電池替え即立春を指す時計	武田　和郎	130 3
行く春のヨガ教室に「ぬ」と手足	樋口　博徳	131 5

加藤　法子

水無月の膝から下はわからず屋	横須賀洋子	128 3
煙突はひとりものです急に秋	岡田　淑子	128 4
春がすみ宙にまなこを置き忘る	長井　寛	129 8
蛇穴に入る物騒な世は御免	金澤　惠子	129 8
食はるるとは想定外の海鼠かな	鈴木まんぼう	129 9
廃線の先は故郷柿の秋	泉　志眞子	130 2
蛇穴を出る素的な出会い期待して	高橋富久江	130 2
本能と遊び疲れてきりぎりす	長濵　聰子	130 3
一生をここで終えると秋茜	坂本千惠子	130 4
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく	檜垣　梧樓	131 4

黒澤　雅代

青柿の落ちては遠くなる記憶	井上きよ美	128 2
蒼然とやがて騒然牡丹雪	岩佐　久	128 2
木漏れ日の道ふうっと此処まで来たね	加納ひでこ	128 3
冬めくとおもう遠くの工事音	楠見　惠子	128 4
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く	塩野谷　仁	129 8
瞬（まばた）きのこぼれやすくて蝶の昼	清水　伶	129 8
だるまさんころんだ春落葉ざくざく	久野　康子	129 9
来し方を丸ごと齧る冬りんご	久保　筑峯	129 9

人の顔って眼のことさ冬の星　高橋　宗史　130 2
我という旅人と行く夏の雲　鳴戸　奈菜　131 5

袴田　菊子

水の私語盗聴しました熱帯魚　山中　頼子　128 2
瓶を出て帆船船出する朧　興津　恭子　128 3
シクラメン男の靴は海へ向く　加藤　法子　128 4
身の内に秘境がありぬ竜の玉　神作　仁子　129 8
真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁　129 8
日の暮れは木の実に戻る木の実独楽　黒澤　雅代　129 9
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠　130 4
源流の滴りを飲む雲の上　田端　重彦　131 4
夏山へ突っ込んで行くあずさ号　関谷ひろ子　131 4
指笛の風が沖より大根干す　倉岡　けい　131 5

東　國人

コペルニクスの廻した地球けむり茸　吉岡　一三　128 2
りんご噛む宇宙はまるいものばかり　岡田　淑子　128 4
花散るやどうでもいい過去すてちまお　大澤　重市　128 4
寒月光平和はいつもガラス質　黒澤　雅代　129 9
菩薩にも生命線あり涅槃西風　高橋由紀子　130 3
憂国の地軸を探すなめくじり　大薗　智子　130 10
揚げ雲雀少し左が青鞜派　羽村美和子　131 5
戦争が好きな星なり我が地球　鳴戸　奈菜　131 5
「ふ」のなかをペンギン急ぐぼたん雪　樋口　博徳　131 5
ひとりとはもはや空缶秋の風　袴田　菊子　131 5
ひとりとはもはや空缶秋の風　**袴田　菊子**

作者は、ひとり孤独な生活を送っているのだろうか。たぶん、そうだろう。それを「もはや空缶」と皮肉交じりに例えている。その比喩がすばらしい。秋の風に流され転がっていく空缶の姿が思い浮かび、その空缶は紛れもなく作者の現在の姿だ。孤独感を「空缶」の二文字のみで、巧みに表現した佳句である。

岡田　淑子

晩節の指のささくれ罌粟坊主　池田　博臣　128 2
花野来て呼ばれたように齢をとる　山﨑　政江　128 2
まだ続く晩年秋は気まぐれ　横須賀洋子　128 3
「イマジン」を聞きたくないか山椒魚　加倉井允子　128 3
さくら草仲良きこともくたびれる　加藤　法子　128 4
死ぬ迄は生きるが仕事やいと花　高橋富久江　130 2
水中花女の余熱尽きるまで　長濵　聰子　130 3
身の丈で渡るこの今蓮開く　高桑婦美子　130 4
吾と我戦っている残暑かな　徳吉洋二郎　131 4
海の墓標飛び魚の翅透くところ　羽村美和子　131 5

林　みさき

いちょう落葉横断歩道に縞馬臥し　吉岡　一三　128 2
書初紙の書き誤ってひれ伏す子　遠藤　寛子　128 3
初仕事まず一本のチョーク折る　片岡　秀樹　128 3
幸せの完全雇用蟻の列　小野　裕文　129 8
せっかちのカーリングのごと落葉掃く　鈴木　房州　129 9
うしろ手に菫を隠し冬将軍　田口満代子　130 2
夏負けて草間弥生の中に居る　永井アイ子　130 3
付けつ放しの国会中継春眠し　高橋　健文　130 4
嬰の手が閉じてひらいて春摑む　田村　麗　131 4
春寒や握り返さぬ手を握る　中山　皓雪　131 4
初仕事まず一本のチョーク折る　**片岡　秀樹**

初仕事。さあやるぞ！　この句に作者のやる気満々の気迫を感じとった。チョークは折れ易い。偶然に折れたのか。書きやすい長さに故意に折ったのか。やはり力余って折れた可能性が大である。いずれにしろ、仕事への情熱は並ではない。昨今、黒板はホワイトボードへと進化した。作者は元教師か。で、あれば自身の意気盛んであった頃を今に引き寄せ、当時を髣髴させる確かな一句に仕上げている。

松澤　伸佳

愚痴一つまあるく抱いて夜の桃　山中とみ子　128 2
戦なき世を慈しみ帰り花　山中　頼子　128 2
幼児の甘い握力花の客　北野　耕兵　128 3
鎮魂の海を剥がして秋怒涛　小野富美子　128 4
来し方を丸ごと齧る冬りんご　久保　筑峯　129 9
春の泥いまだ五欲を捨て切れず　佐々木幸子　129 9
色あせしセーターの恋捨てられぬ　小多田文子　129 10
冬蝶の呪文古墳の謎解けず　千葉　智司　130 2
蒙古斑あさって春が来るという　なかもと淑子　130 4
冬薔薇の咲ききる力逃避行　林　ゆみ　131 5

たけなか華那

かと言って無下には出来ず青大将　加藤　法子　128 4
曼珠沙華だれかに水をもらいおり　楠見　惠子　128 4
てのひらに天網はあり冬すみれ　清水　伶　129 8
旧道は農協のまえ芹ふかふか　永井　奈々　130 3
この今の姿を生きる枯蓮田　高桑婦美子　130 4
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠　130 4
煮こぼれる心に目貼して熄む　並木　邑人　131 4
落葉して渓流の眠い体操　倉岡　けい　131 5
海の墓標飛び魚の翅透くところ　羽村美和子　131 5
老鶯や箸間をこぼれゆく煮豆　棗　楕伊　131 5
旧道は農協のまえ芹ふかふか　**永井　奈々**

この一句に人が生きた時間の流れと、今まさに吸いこんだ時間の輝きがある。遠まきに認めた芹であったのか、思わず近づいてかがみこんで見た芹なのか。ふかふかという言葉に息吹きがある。旧道と農協の関係も現実でありながらそこに誘う力がある。作者の眼に事実の先、その奥を視て取る深い心が感じられる。

栗山美津子

蓮にまだ枯れる勢い摩天楼
愚痴一つまあるく抱いて夜の桃
パレットとなりたる一枚柿もみじ
ボート漕ぐ少年男の翳り見せ
菜の花は黄色とみどり君在りて
嬰の手が閉じてひらいて春摑む
炎天を抜け東京を抜けられず
手を撫でる頭を撫でる良夜かな
新豆腐水に無音の光りあり
人去りて人影残る冬のベンチ

山﨑　政江　128 2
山中とみ子　128 2
近藤　幸子　129 10
富澤ムツ子　130 4
高木　一惠　130 4
田村　麗　131 4
徳吉洋二郎　131 4
高野　春子　131 5
野口　京子　131 5
鳴戸　奈菜　131 5

福田志津子

かたつむり何もない日もいそがしい
幸せの完全雇用蟻の列
春昼の木々に声なし兜太亡し
春の泥いまだ五欲を捨て切れず
ふんばって高みを知らぬ水馬
土竜の子そこは野すみれ咲く所
本能と遊び疲れてきりぎりす
父の山鬱蒼とありひきがえる
上州に生まれし矜恃冬妙義
吾亦紅静かに主張通しけり

小野　裕文　129 8
小野　裕文　129 8
塩野谷　仁　129 8
佐々木幸子　129 9
清水三千代　129 10
髙橋由紀子　130 3
長濵　聰子　130 3
中村　直子　130 4
多胡たかし　130 4
日野　葉子　131 4

永井　奈々

花野来て呼ばれたように齢をとる
風光る今が幸せカプチーノ
家中のどの抽出にも残暑
無免許のかなぶんぶんにぶつけらる
もどかしき男盛りを蛍烏賊
みどりごの真水のやうな汗ぬぐふ
如月の骨のきれいな魚を割く
炎天を抜け東京を抜けられず
行合の空去り難き雲の峰
虫干しの一ト日を遠き日に遊ぶ

山﨑　政江　128 2
川又　優　128 4
小野富美子　128 4
國分　三德　129 9
澤田　寿一　129 10
千葉　信子　130 2
中村　冬美　130 4
徳吉洋二郎　131 4
福田志津子　131 4
林　紀之介　131 5

坂本千恵子

幸せの完全雇用蟻の列
ミキサーの渦はさみどり今朝の冬
無住寺の粗き箒目朴落葉
廃線の先は故郷柿の秋
今生きるそれだけでいい去年今年
組紐のかたりことりと伸びて春
夫よりも生き逆光の花野道
百年はすでに来てをり桜守
破蓮捨てた時間に過去が無い
ほうやれほ安寿の塚の稲穂波

小野　裕文　129 8
金澤　惠子　129 8
重田　忠雄　129 9
泉　志眞子　130 2
髙坂　健　130 2
高橋富久江　130 2
長濵　聰子　130 3
髙橋　健文　130 4
田村　麗　131 4
高野　春子　131 5

菊地　京子

蓮にまだ枯れる勢い摩天楼
コスモスの背後は虚空窓も無い
農魂に覚醒のあり雪解水
可惜夜（あたらよ）の夢にピリオド春の猫
妄念を一掃俄に土匂ふ
青嵐卵を割って火がふたつ

山﨑　政江　128 2
岩岡　方子　128 2
小張　直子　129 9
久野　康子　129 9
小出　治重　129 10
杉山真佐子　129 10

吊し雛熱くなってる村役場
遥かなる雪解水から紀行文
万愚節爪は裸のほうがいい
紫陽花やまだある咎をしまいこむ

窪田　俊作　129 10
小池美佐子　130 2
白井　春こ　130 2
直江　裕子　130 3

山中　賴子

風呂敷という知恵袋福寿草
春昼の木々に声なし兜太亡し
チバニアン磁場逆転の春あらし
年輪の育つ音して山眠る
電池替え即立春を指す時計
灯台が見たくて伸びる月見草
嬰の手が閉じてひらいて春摑む
煮こぼれる心に目貼して熄む
滴りの命一瞬発光す
風鈴に二枚舌などなかりけり
電池替え即立春を指す時計

片岡　秀樹　128 3
塩野谷　仁　129 8
島田　翠松　129 8
國分　三德　129 9
武田　和郎　130 3
中村　棹舟　130 4
田村　麗　131 4
並木　邑人　131 4
福田志津子　131 4
吉田　耕史　131 13
武田　和郎

中七に作者の春待つ気持ちが凝縮されています。しかも、作者の日頃愛用している時計を待春の気持ちに代弁させ表現しているところに大変ひかれます。

きっと作者の時計は待ちどおしい春に寄せてリズミカルに時を刻んでいることでしょう。

岡田　春人

コペルニクスの廻した地球けむり茸
独りではなかった初夢のワイキキ
チバニアン磁場逆転の春あらし
夏帽子亡母は満州ハネムーン
ひとつずつもらう太陽蜜柑山
師と歩むトロヤ遺跡の芥子の花

吉岡　一三　128 2
菊地　京子　128 4
島田　翠松　129 8
栗山美津子　129 10
鈴木　郁子　130 2
田口満代子　130 2

玫瑰の咲いて今年の供花とせり　長井　寛　130
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく　檜垣　梧樓　131
マチュピチュの絵葉書がくる小鳥来る　東　公子　131
紅葉ですモンマルトルの恋人よ　羽村美和子　131
チバニアン磁場逆転の春あらし　島田　翠松

「チバニアン」の句は、この欄でも他にもいくつか見うけられ、また、私も詠んだことがある。

地球の歴史の奇跡的な証拠であるチバニアンが、日本でも世界でも今一つ知名度の少ない感じもするが、千葉の俳人が詠んでおきたい句材の一つである。

吟行句かもしれないが、作者は現地を訪れ、春あらしのなか磁場逆転という大事件を想像している。いきいきとした現実感が伝わってくるところが良いと思う。

中村　棹舟

初仕事まず一本のチョーク折る　片岡　秀樹　128
原子炉の見ゆるところに桜咲く　川又　優　128
ゆっくりと老いし二人や蕗の薹　佐藤美紀江　129
春夕焼父の居そうな雑木山　小張　直子　129
泣くな妻桜が雨に濡れたとて　髙橋　宗史　130
水無月を眠る喪った日を眠る　直江　裕子　130
夕端居猫に教わる風の道　富澤ムツ子　130
十二月八日節穴から朝日　中村　直子　130
夫見舞ふだけの元日暮れにけり　中山　皓雪　131
人去りて人影残る冬のベンチ　鳴戸　奈菜　131

佐藤　映二

夫見舞ふだけの元日暮れにけり　中山　皓雪　131
堅香子や嬶歌の山を目覚めさせ　田端　重彦　131
喝采の薔薇へ傾くピチカート　富澤さち子　131
豊年や縄文土器に火の記憶　津髙里永子　131
炎天を抜け東京を抜けられず　徳吉洋二郎　131
抽斗に塩あめ残る晩夏かな　浪本　恵子　131
溽暑転た寝ずぶ濡れの母に会う　馬場　益江　131
木の実独楽打ち合っており心電図　倉岡　けい　131
海の墓標飛び魚の翅透くところ　羽村美和子　131
蟷螂に軸脚のあり伏しにけり　野口　京子　131
喝采の薔薇へ傾くピチカート　富澤さち子

ピチカートという語からの連想だが、毎年恒例となったウィーンからの全世界放映のニューイヤー・コンサートがある。ウィーンフィルが奏でる数々の舞曲のうち、弦楽器のみで奏でられる「ピチカート・ポルカ」。会場のウィーン楽友協会ホールは南国らしい花園から届いた薔薇やその他の草花で飾り立てられる。喝采は、この曲が終って送られる拍手には相違ないが、中七・下五に盛られた「薔薇へ傾く」楽の音という表現に脱帽する。

井上きよ美

花野来て呼ばれたように齢をとる　山﨑　政江　128
冬麗の少し酸っぱい赤ん坊　楠見　惠子　128
八月や無口な父がしゃべりだす　重田　忠雄　129
死ぬ事は生きたる証し春夕焼　小張　直子　129
初夢の出口に耳が立つてゐる　越野　雄治　129
酔芙蓉少女の恋と解いてみる　坂本千惠子　130
夫見舞ふだけの元日暮れにけり　中山　皓雪　131
ジャズは朱夏自由席なら空いている　富澤さち子　131
手を撫でる頭を撫でる良夜かな　高野　春子　131
青鬼灯派手な代車に小さく乗る　馬場　益江　131

小多田文子

卓に葡萄神の怒りの続く海　山﨑　政江　128
汗の衣脱いで羽化するおとこかな　山中　賴子　128
身の内の火種は絶えず冬椿　小野　功　128
てのひらに天網はあり冬すみれ　清水　伶　129
負ふものを仕舞ひきつたる雛の顔　近藤　幸子　129
水中花女の余熱尽きるまで　長濵　聰子　130
電池替え即立春を指す時計　武田　和郎　130
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠　130
この雨は行間らしい炭用意　並木　邑人　131
新豆腐水に無音の光りあり　野口　京子　131
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠

別れの形は色々ある。さようならの挨拶をしての別れ。さようならは無くての別れ…等々。作者との別れは突然の別れでしょうか？　それは薔薇より濃き別れであったと言う。薔薇の美しさは万人の心を捉えとりこにする。花言葉は愛。それ以上の濃き別れとは。別れの悲しみや辛さを越えたものは作者と対象との強き愛だったのであろう。濃き別れと言い切る。

横須賀洋子

水鉄砲頭よき子を狙ひ打ち　をがはまなぶ　128
公平と云ふが怪しき栗ごはん　大坂　吉也　128
幸せの完全雇用蟻の列　小野　裕文　129
七年を雨降るごとく受け入れる　白木　暢子　129
赤紙のごときが飛んで運動会　小林　実　129
嫁がきてドクターがくる更衣　千葉　信子　130
散蓮華この世の風がなつかしい　高桑婦美子　130
愛なくて何の秋刀魚ぞほろ苦し　富澤ムツ子　130
御慶にも濃淡のあり茜雲　中山　皓雪　131
我思う故に田螺が歩きだす　吉田　耕史　131

❑❑ 津田沼研究句会報告 ❑❑

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三二四回（令和元年五月十四日）

司会　徳吉洋二郎

吊り革のばらばら揺れる大夕焼　岡田　淑子
木村屋のあんぱん二つ労働祭　徳吉洋二郎
山藤のおいでおいでは遠すぎる　横須賀洋子
噛みますとある檻静か夏は来ぬ　なかもと淑子
身体ごと取り替えたい夏が来た　金子　未完
憲法記念日猫に三ツ星グルメ買う　村上　澄子
裏庭の十薬をひく風の道　伊与田すみ
眼裏の乾き梨の花の白　星野　一惠
金魚藻のゆれてきんぎょの昼休み　深山きんぎょ
令和生まる「旅人」「憶良」の宴より　檜垣　梧樓
西暦のレールに令和梅雨の蝶　池田　博臣
青蛙平成令和変らない　吉野　精
ネモフィラの丘や防人往きし丘　高木　一惠
幕の内よき塩加減麦の秋　股野　久子
新緑の暇を自由に惑いつつ　白木　暢子

●第三二五回（令和元年六月十一日）

司会　池田　博臣

心身の複雑骨折夜の薔薇　徳吉洋二郎
苺潰しふとさよならと呟きぬ　横須賀洋子
梅雨に入る母の繰り言不意をつく　なかもと淑子
草刈りの今朝はここまで猫の墓　伊与田すみ
両手置きこの世に正座雨蛙　村上　澄子
夕焼けて衣桁ひつくり返りたり　檜垣　梧樓
インターチェンジぐるりと囲む大青田　金子　未完
羽抜鶏Ｂ型家族はてんでんこ　星野　一惠
青大将とんとゆえなき現在地　池田　博臣
旅の人今どのあたり新茶汲む　股野　久子
六月の地図は青き山ばかり　岡田　淑子
色鉛筆貸してください蝉生る　並木　邑人
頂いた五人家族の豆ごはん　吉野　精
夕日溶け羽抜孔雀の尾をひらく　高木　一惠
梅雨寒や転ばぬ先の免許返納　白木　暢子

●第三二六回（令和元年七月九日）

司会　伊与田すみ

透明な傘さしてゆく青葉闇　星野　一惠
日がみなり猫なまぬるき息を吐く　深山きんぎょ
鬼退治われも連れよと羽抜け鶏　檜垣　梧樓
オンザロック独りの夜の処方せん　徳吉洋二郎
白南風やゆくさきざきの石仏　池田　博臣
半夏生美人はいつも美人です　吉野　精
夏祭り暗渠をぬける神田川　岡田　淑子
だまし絵の靴のとんがり緑の夜　前島きんや
片陰に硬貨を食べる自販機　金子　未完
七夕に逢いたい人がわからない　白木　暢子
雨に唄えば南天の花こぼれ　なかもと淑子
ひなげしや笑え笑えと人には言う　高木　一惠
人の輪のいくつかさなり梅雨晴れ間　伊与田すみ
電子機のマニアル嫌い梅雨の蝶　村上　澄子
音高く暦をめくる衣更　股野　久子

❑❑ 青葉研究句会報告 ❑❑

（於：千葉市民会館・四階）

●第九十三回（令和元年五月二十三日）

司会　細根　栞

新樹光女医に晒せり雲雀骨　石井紀美子
「戦争に誰が行くもんか」麦の秋　鈴木まんぼう
美しき守宮になって帰り来る　小林　実
望郷の昏きところに囮鮎　加藤　法子
人体に宇宙はいくつ夏薊　越野　雄治
華奢な音きっとあいつのピンヒール　細野　一敏
華麗なる徘徊四万六千日　細根　栞
鳩尾の真芯華やぐ茅花かな　たけなか華那
合歓の花手に重たきの散蓮華　森井美惠子
桐の花こころの芯の折れる音　池田　博臣
ジャズ一瞬過ぎる五月のオープンカー　長濵　聰子
東京行鈍行列車菜種梅雨　徳吉洋二郎
6月へ病葉予言者などいない　松﨑あきら
胸底に弱気のあり走り梅雨　山﨑　幸子
天牛がキチキチ鳴いて華燭なり　並木　邑人
更衣令和の風を存分に　矢野　忠男
たかんなに跨る神の太っ腹　三須　民恵

●第九十四回（令和元年六月二十日）

司会　徳吉洋二郎

ひっぱってあける鯖缶夕薄暑　加藤　法子
凡人と奇人のあわい平泳ぎ　池田　博臣
甘酒啜るランゲルハンス島の午後　越野　雄治
虚実のあわい水無月の地平線　徳吉洋二郎
水遣りは公平な放物線　たけなか華那
山積みのバナナ平和の香を放ち　鈴木まんぼう
梅雨深し下谷横丁に昭和無し　吉野　精
海鳥の水平思考夏に入る　長濵　聰子
のり平のノリにて夜盗虫ごそっ　並木　邑人
栗の花身に覚えなきストレス　矢野　忠男
ニッポンの平和呆けした御器噛り　三須　民恵
お平らに梅雨の邦入る曽良芭蕉　細根　栞
一生は太平楽ぞ梅を干す　長井　寛
守らねばならぬ嘘と平和と麦の秋　細野　一敏
わたくしと戦争と叔父のマラリヤと　小林　実
　　山﨑　幸子

夜の新樹声なき声に噎せている　森井美惠子
黒南風の三猿　子殺しのニュース　松﨑あきら
蛍籠平家の裔と謂れても　矢野　忠男

●第九十五回（令和元年七月二十五日）
司会　池田　博臣

御器齧り夜の人間探求派　鈴木まんぼう
夕焼の裏側きっとのっぺらぼう　細根　栞
翡翠のこなごなになる水鏡　長井　寛
走塁をセーフにしたる夏の蝶　吉野　精
伸びきらぬ輪護謨なりしか走馬灯　森井美惠子
すぐ走るこども夕焼けを信じなさい　たけなか華那
蟻の列上野は遠くなりにけり　徳吉洋二郎
空ばかり見ている八月十五日　加藤　法子
夏燕円周率を掛けて雨　矢野　忠男
羽化したいわたし晩夏は猫でいる　長濵　聰子
むずむずと富士の須走梅雨寒し　三須　民恵
ネムの木やまさかまさかの逆走す　細野　一敏
弓道の眼差走る麦の秋　並木　邑人
夏のオフィーリア流れて床の下　池田　博臣
うつつ世を走り去る人と遠花火　山﨑　幸子
雷走る肖像はみな左向き　越野　雄治
少しだけ隠している水着　希望とは禍　松﨑あきら

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第八十三回（令和元年五月十一日）
司会　椎名　鳳人

夏みかん採る一つの重さ戻す枝　岡田　春人
春深し女詐欺師がわが街に　佐藤　鈴子
墓パンの哲学聞いている　木之下みゆき
白昼の立夏を回る洗濯機　長井　寛
饅頭に令和の焼印こどもの日　井上けい子
女性フォーラム華やぎて桜鯛　野口　京子
蛇苺薬草毒草似ておりぬ　髙橋　宗史
改元の魁として白牡丹　椎名　鳳人
石蹴りの石の行く先みな朧　栃木　きよ

●第八十四回（令和元年六月八日）
司会　椎名　鳳人

掌の冷奴ピカソのキュービズム　長井　寛
虚でもあり実でもありて水中花　川上　典子
疾走の時は来たれりかたつむり　木之下みゆき
菖蒲湯の菖蒲に遠慮する男　岡田　春人
燕の子朝の明るさ通し土間　小林　俊子
獣臭き首なし地蔵梅雨に入る　椎名　鳳人
すめらぎの森の祭典新樹光　井上けい子
首で歩く山鳩若葉揺れている　髙橋　宗史
真夏日やそろり吊られて不発弾　野口　京子
緑蔭や白長須鯨見たと言う　下村　洋子
ため池や刻をとじこめ春の貌　栃木　きよ

（於：柏市・アミューゼ柏－七月のみ）

●第八十五回（令和元年七月二十日）
司会　小林　俊子

桃は桃バナナはバナナ香りけり　岡田　春人
暗号流出あり水中花咲き乱れ　椎名　鳳人
唐黍のぶつぶつ甘きアンニュイの午　佐藤　鈴子
河鹿聴くはるか稜線北斗星　小林　俊子
訪問者選っていいかしら星まつり　木之下みゆき
耳鳴りは蟬潮音を宿す貝　髙橋　宗史
遠き日や父の寝顔の涼しさよ　栃木　きよ
狐の剃刀旅人の静ごころ　長井　寛

《会員・会友の近況》②

・「源流」主宰の小出治重先生が亡くなられた後も会員の佐藤さん、置鮎さん、土肥さんを中心に句会が続けられています。小出治重先生の「追悼集」、「主宰俳句語録」が全員に配られ、悲しみをのり越えようとしています。（齋藤　溥子）

・九十歳を過ぎて家にごろごろしているといけないと思い、お陰様で俳句を作っていると元気が出ます。お友達が優しくして下さるので本当に有難いと思っています。どこも病気がないのは生来ののんき坊主のせいでしょうか。俳句のお陰です。（岡田　淑子）

・今年で結婚五十年を迎えた。良かったのか悪かったのか、まだ分らない。（小林　実）

・大正に生を享け、あの昭和から平成そして令和の今日へと。先日の海軍記念日に海軍（生徒）時代の最後のクラス例会を平成の終りを機に実施。みんな九十余歳。「あんな事こんな事あり終戦日」です。（佐久間眞城）

・「岳俳句会」に所属し二十数年が経ちました。未だに作句は行きつ戻りつです。佳い句に出会いもっともっと学びたく存じます。良い企画を有難うございます。（佐藤　浩子）

・一人暮しがだんだん難しくなって、近くのケアホームに移りました。（鮫島いづみ）

・二〇二〇年、いよいよ東京オリンピック。そして千葉県現代俳句協会四十周年の記念行事が迫りつつあり、話題も業務も溢れんばかりかとお察し致します。私の所属する「京鹿子」も同年秋、創刊百周年記念行事が控えており、落ち着かぬ日々です。スカイツリーもオリンピックカラーが点灯しはじめました。（上野　紫泉）

ひろば

■野田俳句連盟創立七十五周年記念第一五〇回大会

平成三十一年四月二十八日（日）、野田商工会議所に於いて一五〇回大会が開催された。俳句大会に先立ちお招きした高野ムツオ先生の講演「兜太と鬼房」が行われた。大会の出席者は八十三名、欠席投句者二十四名、計一〇七名と盛況だった。なお、出席者は当季雑詠二句、席題（朝寝）一句を投句。欠席投句者は当季雑詠二句。

（髙橋宗史 記）

来賓・顧問・会長詠（順不同）

藤岡貞夫先生　度忘れを笑ひあひたり万愚節
高野ムツオ先生　朝寝して野田の醤油の香に目覚む
戸邉光一先生　新樹光ひとつ空いてる指定席
実籾　繁先生　柿若葉令和維新の風生みぬ
秋尾　敏会長　逃水を十七音で呼び戻す

入賞者（三句合点、代表句　○内は順位）

市長賞
花過ぎの夜へとびだす壺の耳　星野　一惠

議長賞
正論は誰でも言へる蟇　鈴木　岑夫

教育長賞
野蒜掘るたましいの奥まさぐりて　小張　直子

連盟賞
一グラムの名刺の重み新社員　豊島　京子
⑤朝寝して風の青さを見逃せり　西﨑　久男
⑥底力秘めて崩るゝ花筏　戸邉　光一
⑦作業着の匂ふがままの朝寝かな　山村　自游
⑧黙祷を解かぬ少女や花の冷え　井上きよみ
⑨夫という不思議な他人と朝寝かな　鈴木　弘子
⑩地平めくチェロ五線譜の朝寝　諸藤留美子

図書紹介

■句集『赤石岳』　岡田　春人

平成三十一年四月十八日刊　現代俳句協会

骨壺に弾丸一つ南風
春愁や土に埋めれば土になり
花野なり我も小さき色となる

■句集『体感』　横須賀洋子

令和元年六月二十一日刊　文學の森

人日やとうに人香を逸れている
大根洗う一人娘を抱くように
中指は小指に遠し秋の暮

■句集『遠方』　吉岡　一三

令和元年六月二十五日刊　現代俳句協会

六角は愛するかたち糸とんぼ
また河鹿人に後れていて普通
蝗仲間いなごを取りに行ったきり

掲示板

≪会員・会友異動≫

●逝去（会員）川辺まさじ、関千賀子
●退会（会員）原　京、吉川たけを
●移転（会員）菅ノ谷文子（地区内移転）
（会員）八重樫弘志（神奈川県へ移転）
（会員）広瀬志都子（埼玉県へ移転）

●新会員
飯塚　宣子（会員）「軸」秋尾敏紹介
浪岡はるか（会員）「遊牧」塩野谷仁紹介
平岡　育也（会員）「軸」秋尾敏紹介
平山　千揚（会員）「麦」対馬康子紹介
南川　好玄（会員）「軸」秋尾敏紹介
横山　郁子（会員）「軸」秋尾敏紹介
和田　三枝（会員）「軸」秋尾敏紹介

≪令和元年度第二回幹事会≫

日　時　令和元年五月二十一日（火）
場　所　船橋市勤労市民センター
●午後三時より四十周年記念事業実行委員会。
記念式典・記念俳句大会・合同句集刊行・基金募集のそれぞれの委員会で討議。
●午後五時より幹事会。熱心な討議が行われた。
議　題
一、平成三十一年度総会・俳句大会の結果について
二、現代俳句協会の動向について
三、創立四十周年記念事業について
四、関東甲信越静ブロック連絡協議会について
五、各研究句会の状況について
六、その他、会員会友の入退会状況。緊急連絡網。
次回幹事会　8月27日（火）

❑❑事務局・編集部だより❑❑

●合同句集（振込用紙添付）・秋の吟行会・四十周年記念俳句大会と各応募用紙を同封しました。東京五輪も一年を切りました。私たちも奮起いたしましょう。

現代俳句千葉　第一三四号
令和元年九月一日発行
発行人　千葉県現代俳句協会
会長　並木　邑人
現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき
千葉県現代俳句協会事務局
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台
七-八-二八-八一〇
羽村　美和子
TEL・FAX　〇四三-二五六-六五八四